

点-閃光

私にとって写真とは、今・ここにあることが、相互に浸透し合い、重なり合いながら、その関わり合いのうちにあるものであることを確認するためにある。見るということにかぎるなら、石ころや星の輝きやテレビの流す映像や、そういった日々の情景と（私でもある）それが、網膜を介して互いに出たり入ったりしながら重なり合うことそのものが、（私でもある）それを形づくる。

（私でもある）それが見るその前にすでにそこにあり、にもかかわらず見た瞬間に新たなものに変容するものでもあるために、今までそこにあったものを集めたところで、世界は永遠に見ることのできないものもあるのかもしれない。

だから、見ることの中心はいつも〈空虚〉である。網膜の中心に盲点があることは、神の与えたもう〈しるし〉だ。

19世紀に写真術は生まれた。写真術の生みの親の一人であるニエプスが、生み出されたイメージを「網膜」と呼んだままにその通りに、写真は見ることのできない自らの網膜を擬似的に具体化し、私たちがなぞらえることを赦す快楽装置である。

* * *

写真が存在証明として機能するということは、私たちの事物を知覚するしくみそのものが、写真としてそこに具体化していることにある。

「まなざすと、光が差し込んだ。それは網膜上である模様を構成し、私たちはそれをある事物の私自身に対する視覚的な作用として知覚した。今、私の手元の紙の上に認めることのできる模様は、その模様の一部とよく似ている。」

私がある事物を知覚したその時に、その事物が一義的で絶対的な空間と時間において、単に位置を占めていたか（物体として実在していたか）どうかが問題なのではない。ある事物という様態をもって知覚しようとする志向である、本来は不可視であるはずの〈まなざし〉という、（私でもある）その内と外を貫いた閃光がそこに生産され続けること。それが写真に具わった機能である。《それは=かつて=あった》のは、被写体ではなく、（私でもある）それのまなざしだ。

《私がいま見ているのは、ナポレオン皇帝を眺めたその眼である》と^{*1}。

* * *

アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドは、著書『過程と実在』において、主体によって諸々の客体がひとつのパターンとして感受される瞬間こそが、主体のみならず世界にとってある特別な瞬間であるとして、それを「現在化された持続」と名づけた。この瞬間は、主体とは無関係な単なる一義的な空間と時間におかれた瞬時点ではなく、むしろ主体という器のものに諸々の客体が出会い、主体自身がそれらとともに世界を紡ぐ時であり、まさにここに過程的に主体が生れるとともに、主体にとっての空間と時間が延長抽象化されるところでもあるとした。本作

品のタイトルにつけた「点-閃光」とは、『自然という概念』において、ホワイトヘッド自身がこの瞬間をあらわすものとして使った言葉である。

ひるがえって写真とは、何分の一秒かの間にフィルムやセンサーに到達した光の作用による、ハロゲン化銀の粒子もしくはピクセルが集積することで生まれる模様を表面にたたえる物体であって、当然写された事物（として見る者が指向する対象）とは別物だ。もしその模様のある物体（写真）が、ある事物（被写体）《それ》が《かつて=あった》ことを保証する痕跡であるというのであれば、それを証明するものは、結局は目の前の事物が網膜上に生み出した模様についての私自身の記憶以外にはない。しかし今・ここに、ある写真のある事物の痕跡と同定する私自身の記憶そのものが、そこにかつてあったものと同じだと誰が証明するというのか。

ようするに、《それは=かつて=あった》という写真を介した感覚は、単にかつて知覚したはずの事物を視覚的類比によって想起することでも、単にある時間と場所に固定された、一回限りの私もしくは誰かのまなざしを再現し追体験することでもない。紙の上の点が構成する模様と、私もしくは誰かのまなざしという志向そのものが繰り返し関連付けられて、わたしやあなた、あの時やあの場所といった個別のまなざしを超えた、一般なる〈まなざし〉そのものが抽象化される。写真を介して感覚することは、この〈まなざし〉そのものを経験することからはじまるものであるはずだ。ちょうどそれは、ポンヤリと想起する出来事の進行を、壁にかかった時計の針の進行におきかえて理解することと良く似ている。壁の時計を眺めやるまでは、さまざまな可能性を秘めた、長いか短いか、嘘か本当かも分からぬあいまいな感覚が、時計の針の進行によって具体性をもって表象=再現前化される。このことと同じように、今・ここに、紙の上の模様を出発点に、何ものかを見ようとしつつあった私もしくは誰かの〈まなざし〉《それ》が《かつて=あった》と感覚する。それはすでに、今・ここにある私のものではない。が、確かにかつてあった。なぜならここに写真があるから、と。この感覚の度に〈まなざし〉は外在化し、時間もまた外在化する。この換喻（おきかえ）こそが写真の本性である。

写真とは、単に《かつて=そこに=あった》事物そのものの実在性を証明するものではないし、単にある社会的に共有されるコードにしたがいつつ、さまざまなもの組み合わせ、意図なり観念なりを表わすものでもない。むしろ、世界とはその都度その都度個別に抽象されつつ生じるものであり、同時にたくさんの抽象されえないものがあるということを象徴するための装置としてある。つまり、視覚にかぎれば、各主体の〈まなざし〉こそが、その都度その都度ここ・今を生みだしつつ（同時に知覚されえないものがあることをも含意しつつ）、新たなる（私でもある）世界をつくりだすということを繰り返し確認するためにある。

2016年6月

圓井義典

*1 ロラン・バルト『明るい部屋 写真についての覚書』花輪光訳、みすず書房、1985年、7頁

圓井義典様

写真作品、拝見しました。専門外ながら自分なりに解釈してみると、写真論や記号論というよりも、知覚論やオントロジー（存在論）の領域で写真を捉える試みとして理解しました。学者A. N. ホワイトヘッドが「有機体の哲学」で説くように、私たちの知覚は、知覚されている対象と知覚している〈私〉の二項関係で成り立つのではなく、照射される光や大気の揺らぎ、メガネやコンタクトレンズ、眼球や視神経といった知覚者の身体など、さまざまな要因が有機的に関係することで成立しています。知覚作用の先に何らかの実在物が存在するとしても、それがそのまま知覚風景に映じられているわけではなく、知覚風景と実在物の間に介在する諸要因によって歪められ、その歪みをまるごと含んで知覚経験が生起するでしょう。あるいはむしろ、さまざまな要因が、時間や空間が開けてくる張りつめた〈場〉において複雑に絡み合うことで、知覚経験という一つの出来事が生起するのであって、知覚者の眼や知覚対象は、それら諸要因の一部に過ぎないといった方が正鵠を射ているのかもしれません。ちょうど星々の光が、相互に干渉し合い、重力場に歪められながら、何万光年という道のりを、何万年という時間をかけて地球に届き、〈今ここ〉で知覚されるように、多層的な時間的奥行きをもった空間的歪みのなかで、存在者たちが存在の共同体をなし、結節点を結ぶこと、それが、知覚経験という一つの出来事の生起だと考えられます。星々に乙女座や山羊座などと意味づけしたところで、夜空には、点が散在しているだけなのですから、事物の意味というのも、所詮、存在論的な出来事に、私たちが半ば勝手に付与した解釈に過ぎないのかもしれませんね。〈それ〉が何であるのかわからなかったり、眼がかすんでぼやけたり、錯覚として映じられたりしている、知覚の原風景こそが、〈見ること〉にして〈新しい存在の生成〉に他ならない、そんな風に鑑賞しました。勝手な解釈を申し上げましたので、まったくの見当外れかもしれませんが、これもまた一つの〈見ること=新しい存在の生成〉として、どうかご容赦ください。

吉田幸司